

の後にくるように、実際には寒さは益々厳しくなっています。しかし確実に一陽来復で春に向かっていきます。私たちが心しないといけないのは、今の経済・景気の問題も、確実に冬至は過ぎましたが、まだこれから厳しい、大きな寒さ——つまり小寒や大寒がやってきます。

雨が降ると言われたら傘を用意するように、寒くなるのがわかっていたら、軽装ではなく温かい上着など、それなりの準備をします。

また洞察力のある方でしたら、ほんのわずかな変化を見つめることによって、何を教えているかを必ず見ることが出来ます。リーダーに最も必要なのは、この兆しを見る目を持つことであると、易経の中では言われています。

例えば現象面をわかりやすく言うと、ベストセラーやヒット曲などがピークを迎えた時は、もう衰え始めているのです。最高に見える時、もうとっくの昔に死の方に進んでいます。そういう捉え方ができない人は、現象面でのピークを見た時に「すごい」と思うってしまうなど、目眩ましにあってしまうことになります。

リーダーは、目に見えるものでごまかされることなく、わずかな兆し……一番下の一陰あるいは一陽が起きた段階で感じなければなりません。何か変な、何か不自然な動きがあった場合、これが兆しです。それが何を意味しているかを捉えなさい、と書かれています。

優れた組織の中に出てきた小人をそのままにしておくと、その小人が力をもって、組織は塞がってしまいますので、最初に小人が出てきた段階で気づき、対処することが大切です。

もう1つは聞く耳があるかどうか。鼎は3本の脚が付いた食物を煮炊きする入れ物で、易経にも出てきます。蓋・入れ物・脚・耳があって、最も大切なのは耳です。耳とは把手のところ、持って運ぶ時に掴む部分を言います。春秋戦国時代、各国の情報を聞くために多くの賢人を招いて、煮炊きした物をふるまいました。多くの人に食べ物ふるまいながら、皆の声に素直に耳を傾け、いろいろな意見をきちんと聞いた。聞く耳がないと鼎の意味がないわけです。1つの物を大切に育てていけば、最も必要なのは聞く耳を持つことだと易経は教えています。

易経の本は本屋さんで売っていますので、できましたらお買いになって目を通してください。

#### 卓話のご案内

2月3日(水)

「まだまだ楽しめる私の演劇人生」

女優 たかべしげこ氏



卓話(青木 勉プロ  
プログラム委員長)

「中国古典『易経』より  
一陽来復」

占いの玉手箱代表

竹村亞希子氏

中国の古典の中で最も古いとされている『易経』『書経』『書経』は、世界最古の書物の1つで、一陽来復(1つの陽が再び巡り来た)は春が来た・春が来るという意味です。日が一番短い冬至を過ぎれば、ゆっくりと確実に日は長くなります。最も陰が盛んなのが冬至で、すべて陰でできています。どんな物事でも時間でも空間でも一瞬たりとも止まっていることはないという考えのもとでは、冬至の瞬間に一陽が一番下に入ってきて、陽が育ち始め、だんだん夏至に向かいます。冬至が過ぎると春に向かって暖かくなっていくはずですが、小寒・大寒は冬至

潜象